

(舞台劇脚本)

汚れちまつた悲しみに — 中原中也の生涯 —

狩谷 新

S1 1992年4月25日

陽だまりの縁側で一人茶を飲んでいる中原フク(101)のとこ
ろへ緒方絹江(61)がやってくる。

フク「息子さんがお亡くなりになったそうですね」

絹江「ええ、それで、フクさんに慰めていただけこうと思ひまして」

フク「息子六人の内三人に先立たれましたからね」

絹江「豊は、私がこちらへ来てからですから、死に目には…」

フク「親より先に逝くのは最大の親不孝といひますから…」

絹江「でもまだ4か月です。そんなに早くこつちへ来られても…」

フク「確かに、こちらでは、育つてことはありませんからね」

絹江「豊は24年を振り返るしかないんです」

フク「長男の中也が30年、三男の恰三(こうぞう)は20年、次男の亜郎(つぐろう)は、4年しかありません。私の101年を3人に分けてやりたかつた」

絹江「中也さんが生まれたのは…」

フク「1907年、明治40年4月29日です夫の謙介が30歳、

私が27の時です」

絹江「跡取りさんでいらした」

フク「私の父は長男だったんですが、37歳で亡くなつて、私は祖

父の医院を継いでいた叔父夫婦の養子になつたんです」

絹江「おじさまにお子さんは？」

フク「おりませんでした。私は、いづれ婿をとつて、中原医院を継ぐことになつたんです」

絹江「中也さんは久しぶりの御子さんだった」

フク「赤ん坊が生まれたのは40年ぶりでしたし、それが男の子ですから、もう大変な事件でした」

絹江「ご主人はいらつしやらなかつたんですよね」

フク「謙介は軍医として、旅順におりました。それで、私も実の母に付き添つてもらつて、中也を連れて、11月3日に実家を出て、門司から船で大連へ行つて、そこから、旅順で2か月、対岸の柳樹屯で7か月」

絹江「戦争はもう」

フク「そつちは落ち着いとりました。ただ、中也が天然痘にかかつて、もうだめかと一時は覚悟したんです」

絹江「ご主人がお医者様だから」

フク「確かに謙介は、色んな器具を用意してたんですが、そこまでひどくならずにはすみました」

絹江「1歳のお誕生日は、あちらです」

フク「11か月で歩くようになつて、8月に山口へ戻つた時には、小さな汽車のおもちゃで遊んでました」

絹江「その時はご実家で」

フク「ええ、でも翌年には謙介が転勤になつて、2歳の誕生日は広島です」

絹江「その時お母さまは？」

フク「実の母ですね。一緒に来てくれました。山口では、甘やかし

のじいさん、ばあさんが3人でしたから、それでも二人減って、少しは厳しくできるようになったんです」

絹江「まだ小さいのに」

フク「厳しいのは私だけ、謙介もあちこち連れまわして甘やかしてばかり」

S2 1910年5月某日 広島

釣りをする謙介の隣に座っている中也(3)

謙介「中也はいくつになったんだ」

中也「三つだよ」

謙介「そうか、でも父さんがこうして釣りに連れて行ったことなか、きっと忘れてしまうんだよな」

中也「大丈夫だよ。縁側に陽が当たってて、樹脂(きやに)が五彩に眠る時、柿の木いっぼんある中庭(にわ)は、土は枇杷いろ蠅がなく。稚廁(おかわ)の上に抱えられてた。すると尻から 蛔虫(むし)が下がった。その蛔虫(むし)が、稚廁(おかわ)の浅瀬で動くので、動くので、私は吃驚(びっくり)しちゃまった。あああ、ほんとに怖かった。なんだか不思議に怖かった、それでもわたしはひとしきりひと泣き泣いてやっただ。ああ、怖かった怖かった。部屋の中はひっそりしている。隣家(となり)は空に舞い去っていた(三歳の記憶)」

絹江「三歳でこんな詩を？」

フク「まさか！これは中也が大人になってから書いた「三歳の記憶」っていう詩です。あの子は一度も行ったことのない横浜や覚えているはずのない旅順のことも私の話を頼りに詩にしているんです」

絹江「同じ年に弟さんをお生みになったんですよね」

フク「10月で、鉄砲町に引越したばかりで、次男だったんで鉄次郎ってつけようと思っただけですけど、謙介は凝る方で、アジアの皿を「つぐ」って読んでつぐろう。でもみんな「あろう」「あろう」って呼んでました」

絹江「4歳で幼稚園に通わせたんですよね」

フク「近くに軍のほとんどの将校さんのお子さんが通ってらっしゃった幼稚園があったんですが、親の階級を先生が気にするって聞いて、ミッシヨン系の広島女学校付属幼稚園に入れました」

S3 広島女学校付属幼稚園

♪ ももくろちゃんZ&クレヨンしんちゃん「笑ー笑ーシャオイーシャオ」を踊る。

絹江「ここで、キリスト教と親しんだんですね」

フク「私の養父母が熱心なキリスト教徒で、1926年に、ザビエル記念碑を作ったほどでしたから、じいじとはあは幼稚園を気に入ってみたいね。でもせいぜいクリスマス会でイエスの誕生を演じるぐらいでしたから」

絹江「洗礼は受けられなかったのね」

フク「ええ、10月24日に三男の恰三(こうぞう)が生まれて、次の年には金沢へ引越しましたから」

中也「私が金沢にいたのは大正元年の末から大正3年の春までである。住んでいたのは野田寺町の松月寺の真ん前、犀川に臨む庭に、大きな松の木のある家であった。夕方弟と二人で近所の子供が集まって遊んでいる寺の庭に行った」

S4 松月寺 1912年10月

5人の子供が遊んでいるところへ弟の手を引いた中也登場。

子供1 「あいそんないな？」

子供2 「寺の前に引越してきた子たちや」

子供3 「なんかいさつとらんか？」

子供4 「おとろしがつてるだけや」

子供5 「名前はなんなん」

中也 「イチロウ」

子供5 「イチオー？こいつイチオーやて！」

子供3 「イチオー？」

子供5 「そや、イチオーや、おもしろい名前や」

子供1 「こまいのは？」

中也 「あろう」

子供2 「イチオーにアローか！」

子供1 「イチオー！アロー、今日から仲間じゃ」

仲間に入って、走り去る。

絹江 「なぜ名前を？」

フク 「あの子は中也っていう名前を嫌っとりました」

絹江 「森隲外先生がつけた名前を？」

フク 「確かに隲外先生は謙介の学校の校長で、山口の実家に来てい

ただいたこともありすが、名前は、謙介の同僚で、旅順で軍

医だった中村緑野（なかむらりよくや）っていう方がつけて下

さったんです」

絹江 「中村緑野さん？」

フク 「中村の中と緑野のやを取って、そのままだと中野って読まれ

ちゃいますから、他の字を当てたんです。隲外先生を名付け親

にしたのは、中也です。大岡昇平さんもすっかり騙されたと

言っております。とにかく金沢では、中也はずっとイチオー

と呼ばれてました」

中也 「神明館という映画館があった。その弁士の子供が幼稚園の

同級にいて、時々フィルムのきれっぱしを持ってきてみんなを

羨ましがらせた。「乃木大将一代記」なる映画は、今以てはっ

きり覚えてる。ある時、神明館の横の空き地に、軽業がか

かった。父に連れられて行ったのだが……」

S5 サークス入口

弁士の子供がやってくる。

弁士の子 「イチオー軽業見よるのか？」

中也 「そうだよ」

弁士の子 「なが、映画館じゃねえ？」

中也 「そりや、軽業のほうは明るいし、楽隊もドンチャカ派手だ

し、薄暗い映画館よりよっぽど楽しそうやからや」

弁士の子 「ちやうな！フィルムだけでも神明館の方が百倍も値打ち

があるんじゃ」

中也 「幾時代かがありまして、今夜ここでのひと盛り、今夜ここ

のひと盛り、サーカス小屋は高い梁、そこに一つのブランコだ

見るともないブランコだ、頭逆さに手を垂れて、汚れ木綿の

屋根のもと、ゆあーん、ゆあーん、ゆあゆあん（サーカス）

フク 「金沢では家族みんなよく映画館に行っていました。謙介が母

と中也、亜郎、女中さんまで連れて行くんですけど、私は恰三

のお守りで留守番でした」

絹代 「それはお寂しいことで」

フク 「でも亜郎は見た映画の話をよくしてくれましたから」

絹代 「中也さんは？」

フク 「あの子はそういう話はようしませんでした。亜郎は人を気遣

う優しい子でしたが、中也はちゃっかりやで、二人で分けるように何かを渡すと、必ず良い方を取ってすぐに食べちゃう。亜郎はすぐに食べないで机がなんかにしまっとく。それで後で食べるんですが、そうすると中也が、もう自分のは無いからそれをくれっていうんです」

絹代「兄貴風を吹かすんですね」

フク「そう、そうすると、亜郎は少し分けてあげる。少しは弟を見習いなさいと叱ったんですが、私の母がなんでも良い方を中也に渡す癖をつけてしもうて…」

絹代「中也さんもそれが普通と思っちゃってましたんですね」

フク「自分は特別だっというふうに思っちゃったのかもしれない」

絹代「小学校へは？」

フク「ちやうどその時期に転勤になりました、家族は連れていけないうことで、中也だけは入学前に山口へ帰りました」

中也「わが生は、下手な植木師らに、あまりに早く、手を入れられた悲しさよ！ 由来わが血の大方、頭にのぼり、煮えかえり、たぎり泡立つ。おちつきがなく、あせり心地（ごこち）に、つねに外界にもとめんとする。その行いは愚かで、その考えは分かちがたい。かくてこのあはれなる木は、粗硬（そこう）な樹皮を、空と風とに、心はたえず、追惜（ついせき）のおもいに沈み、懶惰（らんだ）にして、とぎれとぎれの仕草をもち、人にむかつては心弱く、諂（へつら）いがちに、かくて われにもない 愚事（ぐじ）のかぎりをしでかしてしまふ（つみびとの歌）」

フク「中也を送り出した後も、なんやかんやで後始末があって、私

が、母と子供二人、女中を連れて山口の実家に帰った頃には、中也はすっかり学校にもなれて、遊び回っておりました」

絹代「優秀なお子さんだったんですよね」

フク「金沢の幼稚園は進んでましたから、たいていのことはできて、予習復習するだけで、試験はいつも百点、熱心に取り組んだのはお習字でした。三学期通して全科目最優秀の成績で、ある歳には義経のヒヨドリ越えを…」

S 6 下野野令小学校 学芸会

義経の武具を付けて舞台に立つ中也

中也「源義経と申しますと源平合戦のまさに勇者！時は平安時代の後期！1184年は2月7日！わずか70騎の部下従えて！！やってきたのは平家本陣が構える一の谷の背後！眼下に見えるは、ヒヨドリだけが超えるという断崖絶壁！！これはさすがに！と、戸惑う軍勢、とその時！一頭の鹿が、その急坂を駆け下りていく！！鹿に出来れば馬でも可能！心して下れば馬損なうことなし！義経いうや否や、自ら先陣となつて駆け下つた！！二町ほど下ると更なる絶壁！屏風が立ったような岩場にひるむ一同！とその中に、三浦氏の一派佐原（さはら）の義連（よしつら）叫んで曰く！なんのこれしき三浦の坂で駆け下りるは日常！と真つ先に駆け下る！義経一派も続いて駆け下り、中には馬を背負うツワモノもあり！まさかの敵に慌てふためく平家軍！それに乗じた義経は、所かまわず火をつけまわる！燃える炎に平家は動揺！一目散に海へと逃げた！これぞ世にいう義経ひよどり越えの逆落とし！」

拍手喝采。

担任「うちの中原です。成績も優秀で、校長いかがですか？」

校長「大したものだ。慢心せねばよかろうが…：そうでなければ、おそろしいことにも…」

フク「怖ろしいことが起こったのは中也が8歳の時です。いつも中也の後について、金沢では幼稚園までついて行って、中也が学校に通いだすと、夕方外に出て「お兄ちゃん、はよう帰れ」と待っていたあーちゃんが…」

S7 中村家墓前 1915年1月

墓前で祈りをささげる中也とフク。

中也「あーちゃんは煙になって空に昇ったんか？」

フク「そうやね」

中也「おかあちゃん、また泣いとる」

フク「そりゃあ悲しいから」

中也「僕が死んでも、おかあちゃんはそんなに泣こうかね」

フク「当り前じゃ」

中也「いいや、僕が死んだらあんなに泣くまい」

フク「それから一年、中也は毎日レンゲの花を一杯摘んで、「あーちゃんにお花をあげようと思つて取つてきた」といいながら、仏壇に供え、自転車で近くの川を渡つてしよっちゅうお墓にも参つておりました」

中也「秋の夜は、はるかあの彼方に、小石ばかりの、河原があつて、それに陽は、さらさらとさらさらと射しているのであります。陽といつても、まるで硯石か何かのようで、非常な個体の粉末のようで、さればこそ、さらさらと かすかな音を立てているのでした(一つのメルヘン)」

中也「大正4年の初め頃だったか、終頃であつたか兎も角寒い朝、その年の正月に亡くなった弟を歌つたのが、そもその最初の

ある。学校の読本の、正行が御暇乞いのところ「今一度天顔を拝し奉りて」というのがヒントをなした」

フク「中也がそう書いたのは、ずっと後のことです。あの頃の興味はまだお習字だったと思います。最初はお手本通りでしたが、段々個性的になつて、5年の頃には先生の評価は下がつておりました」

絹代「確かその頃転校なさつたんですよ」

フク「大庭吉蔵っていう先生が中也のような子は、山口師範附属に通わせなさいけんとしきりに勧められまして、歩いて40分もかかるので、かなり躊躇したんですが、結局転校させることにしました」

絹代「かなり程度の高い学校だったんですよ」

フク「それでも中也の成績は良い方でした。クラスの誰も読めなかつた教育勸語をひとり暗唱して、たいそう褒められたそうです」

絹代「朕思うに始めて始まるものですね」

フク「でも中也は、読み終わった後に唄う勝海舟さんが作つた歌が気に入っていたようです」

♪勸語奉答(合唱)

あやにかしこき すめらぎの あやにたふとき すめらぎの あやにたふとく かしこくも 下したまへり 大みこと これぞめでたき 日の本の 国の教えの もといなる これぞめでたき 日の本の 人の教えの かがみなる あやにかしこき すめらぎのみことのままに いそしみて あやにたふとき すめらぎの大御心に 答えまつらん

S8 山口師範附属小学校 1918年10月

黒板の前で話している中也。

中也「父は医者だから、患者があつて夜でも起こしにくると出ていかなければならぬ。夜中でもでていく父の姿を見ると、ああ、いやだな、と思った。お父さんはこの寒いのに、戸外にでていく、気の毒だなと思ひながら、僕は寢床のなかで見ておつた」

後藤信一「大したもんだ。字もきれいだが話し方もどうにいつてる。中也君は詩は好きか？」

中也「先生が授業で読んだとき、聞いたつたおなご先生が三人とも泣いたやつや」

後藤「そうだ。前にも教えたことあつたな。有本芳水っていう人の

詩だ」

中也「君が吹く銀笛（ぎんてき）のひびきに 一つ咲きたる撫子の

花」

後藤「よく覚えてるな。詩は好きか？」

中也「よくわからんが、歌のようで聞こえはいいな」

後藤「そうか、君には短歌があつてるようだな。今度下宿へ遊びに来い」

絹代「あの方は？」

フク「あの頃、小学校に来ていた教生のかたで、後藤さんとおっしゃいます。中也は担任の先生が理科専門だったんで、病院から薬を持ち出して実験ばかりして、発明家になるつて言つておつたんですが、後藤さんが文学への道を開かれたようので、6年生の12月にはこんな作文を書いたりしました」

中也「午前の10時頃、自分は北庭に作文の材料を集めに出た。日は照っていない。ただ白雲が綿のようにプアプアただよつていた。そのすきまからはチヨイチヨイ青雲がのぞき込んでいた。

亀山の突き出たところの木のすきまから白い陽のもれてくるのはつめたい空気を一層つめたくするように思われた。（初冬の

北庭）

S9 中原家縁側 1920年2月

縁側に座つたフクの処へ、中也が封筒をもって走つてくる。

中也「おかあちゃん！ 婦人画報から知らせじゃ」

フク「婦人画報？」

中也「短歌を送つたんじゃ、その結果がきた」

フク「短歌？ どんな歌じゃ？」

中也「おかあちゃんのことや」

フク「いいから読んでごらん」

中也「怒らんか？」

フク「それは聞いてからじゃ」

中也「次選になつたんじゃぞ」

フク「それは大したもんじゃが、それとは別の話じゃ」

中也「仕方ないな。これは5年の時に作つたやつじゃからな。そう

思つて聞いてくれよ」

フク「いいから早く」

中也「筆とりて 手習いさせし我が母は 今是我より拙しという」

フク「覚えとるわ。実際そうじゃから怒りはせん。それより、防長

新聞のより良い方が問題じゃろ」

中也「あつちは入選じゃからな」

フク「冬去れよ そしたらひばりが泣くだろう 桜も咲くだろう」

中也「覚えとるんか？」

フク「冬去れよ 梅が祈つているからに お前がいては 梅がこま

るぞ」

中也「なんや恥ずかしいわ」

フク「ようわからんが、筆の方が良いなあ」

中也「僕もそう思うんや。短歌、続けてもよからう？」

フク「勉強もするんじゃぞ」

中也「…」

フク「その年の4月に中也は県立山口中学校に12番という優秀な

成績で合格しました」

絹代「勉強は続けられてたんですね」

フク「最初は順調でした。でも7月の期末試験で80番に下がって

しもうて、夏休みに直ぐの弟と門司の親戚のところへ父親の代

わりに行かせたんです」

S10 門司・野村家 1920年8月

窓から外を眺めている中也、そこへ文江がやってくる。

文江「弟さんは？」

中也「風呂に入っとる」

文江「あなたは入りやせんのか？」

中也「めんどくさい」

文江「さっぱりするのに」

中也「あんたも一緒に入ってくれるか？」

文江「それはちょっと…」

中也「なら入らん」

文江「中也さんっていうたかしら」

中也「そうや」

文江「中学ではよくおできになるそうね」

中也「そうでもなか」

文江「親戚中で有名よ」

中也「あんたは？」

文江「私はだめよ、女学校でもついていくのがやっと」

中也「いや、名前」

文江「ああ、文江っていうの。文章の文にサンズイにカタカナのエ」

中也「似とるんじゃ」

文江「誰に？」

中也「おなご先生に」

文江「きれいな人？」

中也「毎日、会うのが楽しみやった」

文江「もう会えないの？」

中也「小学校やったから」

文江「おませさんね」

中也「手紙書いてもええか？」

文江「私に？」

中也「そうや」

文江「いいわよ。気に入ったら返事を書くわ」

フク「その娘とは帰ってからしばらく文通しとったんですが、勉強

の邪魔じゃ思うて、私がやめさしました」

絹代「女性に興味が出てましたんですね」

フク「私は文学のせいやと思っとりました。2学期が始まると中也

は本ばかり読むようになって、小遣い全部、本に使ったんで

す。それを先生に言われて小遣いを止めたんですが、そして

ら、立ち読みするようになって」

絹代「成績は？」

フク「12月にまた門司へ行っただんですが、何かが吹っ切れたんで

しょうね、成績は50番まで持ち直したんです」

絹代「文江さんとは？」

フク「それつきりです。でも2年生になると、家庭教師をつけたのに、また成績は下がって来ました」

絹代「その頃ですか？中也さんが黒メガネをかけていたって」

フク「そうらしいですね。5月に祖父が亡くなったんですが、その後、直後に中也の成績は120番まで落ちました。謙介は奮起させようと爺さんの墓碑銘を中也に書かせたんです」

S11 中原家居間 1921年8月

大きな半紙に筆を思い切り走らせる中也

中也「ゆらゆらと雲れる空を指してゆく 淡き煙よどこまでゆくか

白き空へ 黒き煙のぼりゆけば 秋のその日もなお寂しさり
(煙)」

フク「15になった中也は、もう歌人きどりでした。5月に防長新聞の記者さんだった吉田理さんと一緒に、末黒野という歌集を出したんです」

S12 居酒屋 1922年4月

吉田、宇佐川と酒を飲んでいるサングラスの中也。

宇佐川「中也の啄木好きにはあきれるな」

吉田「命なき石の悲しさ よければころがり また止まるのみか？」

宇佐川「それは、いのちなき砂悲しさよ さらさらと 握れば指の

あひだより落つのパクリだ。まだあるぞ、怒りたるあとの怒り

よ 仁丹の二三十個を カリカリと噛む」

吉田「眼の前の菓子皿などを かりかりと噛み締めてみたくなりぬ
もどかしきかな だな」

中也「パクリじゃない。リスベクトだ」

吉田「確かなな。啄木調ってことだな。悲しみは消えず泣かれず
痛む胸抱くが如く 冬の道ゆく」

宇佐川「元はと言えば、俺が悪い。この宇田川が力つきて余白が出
来しまったのが悪いんだ」

吉田「それはそうだが、中也の歌は単なる穴埋めじゃない。若山牧
水の寂しさもある」

宇佐川「冬の夜 一人いる間の淋しさよ 銀の時計の嫌に光るも
か」

吉田「湧くごとき淋しみ覚ゆ秋の日を 山に登りて口笛吹けば 見
事なもんだ」

三人乾杯。
フク「8月に中也は当時家庭教師をお願いしてた村重さんの推薦
で、大分の西光寺というお寺へ行かせました。あちらでは大変
良くしていただいたようで、12月には一人でもまた行っており
ました。でも仏教修行も成績には現れず、3月には落第が決定
したんです」

中也「小学校からいつも一番になれと言われてきた。落第は僕の意
思だった。わざと答えを書かずに出した」

絹代「うちの豊かも自分で退学届を出したんです」

♪ 尾崎豊 15の夜
フク「豊さんが退学したのは高校でしたよね」

絹代「18になってましたけど、心境は中也さんとご一緒ですね。
退学届を出した後、友達とパーティを開いて祝ってたみたい
です」

フク「中也も一緒です。ただ、私たちはそのまま学業をやめさせる
わけにもいかなかったたので、前の家庭教師を頼って、京都の立

命館中学を受けさせたんです」

絹代「そして、見事合格なされた」

フク「そうです。中也是生まれて初めて京都で一人暮らしを始めたんです」

中也「僕は此（こ）の世の果てにいた。陽（ひ）は温暖に降り洒（そそ）ぎ、風は花々揺っていた。木橋の、埃（ほこ）りは終日、沈黙し、ポストは終日赫々（あかあか）と、風車を付けた乳母車（うばぐるま）、いつも街（が）上（が）（がいじょう）に停っていた。棲む人達は子供等（こどもら）は、街（が）上（が）に見えず、僕（ぼく）一人の縁者（みより）なく、風信機（かざみ）の上（か）の空（そら）の色、時々見るのが仕事であった。さりとて退屈（たいくつ）してもいず、空気の中（なか）には蜜（みつ）があり、物体（ぶたい）ではないその蜜（みつ）は、常住（じょうう）（じゅう）（じゅう）食（しょく）すに適（あ）っていた。煙草（たばこ）くらは喫（す）ってもみたが、それとて匂（にお）いを好（よ）んだばかり。おまけに僕（ぼく）としたことが、戸外（とがい）（そと）でしか吹（ふ）かさなかつた。さてわが親（おや）しき所有品（しよいうひん）（もちもの）は、タオル一本。枕（まくら）は持（も）っていたとはいえ、布団（ふとん）ときたらば影（かげ）（かげ）だになく、歯（は）刷（は）子（こ）（はぶらし）くらは持（も）っていてもいたが、たつた一冊（いっさつ）ある本（ほん）は、中（なか）に何も書（か）いてはななく、時々手（て）にとりその目方（めかた）（めかた）、たのしむだけのものだった。女（おんな）たちは、げに慕（こ）（した）わしいのであつたが、一度（いちど）とて、会いに行（い）こうと思（おも）わなかつた。夢（ゆめ）みるだけで沢（たく）山（さん）（たくさん）だった。名（な）状（じょう）（めいじょう）しがたい何物（なにもの）かが、たえず僕（ぼく）をば促（すす）進（しん）、目的（めいてき）もない僕（ぼく）ながら、希望（きぼう）は胸（むね）に高鳴（たかね）（たかね）っていた（ゆきてかえらぬ）」

♪ トランペット演奏

S 13 京都丸太町橋 古本屋 1923年 秋

一冊の本を片手に店主に話しかける中也。

中也「これはどんな本？」

店主「ダダイスト新吉の詩（うた）、か。この高橋新吉（ちゅう）の詩（うた）は、暮（よ）れに「今（いま）から俺（おれ）はダダを全世界（せかい）に宣（のたま）伝（でん）する！」とかわめて、乗（の）っていたタクシーの運（う）転（てん）手（て）をステッキで殴（う）つたやつだ。あんなんでこんなもんに目（め）を付（つ）けた」

中也「音（ね）かな？」

店主「音（ね）？」

中也「ダダイストっていうなんかいい音（ね）なんだ。それに書き出しが氣（き）に入（い）る。『DADAは一切（いっけつ）を断（た）言（げん）し否（ひ）定（てい）する』って、イカシテル」

店主「皿（わ）という字（じ）を24回（かい）縦（たて）書（か）してスラッシュ（し）倦怠（けんたい）なんて詩（うた）を書（か）くやつだぞ」

中也「でも佐藤（さとう）春（はる）夫（と）は序（じ）文（ぶん）で書（か）いてる。ダダイズム（だだいずむ）というものがどんなものであるか僕（ぼく）は知（し）らない。だから高橋（たかはし）がダダイスト（だだいすと）だかどうか（か）もそんな事（こと）も知（し）らない。知（し）る必要（ひつや）もない事（こと）だ。ただ僕（ぼく）は知（し）っている。高橋（たかはし）の芸（げい）術（じゆつ）と生（せい）活（くわく）とはアカデミシヤン（あか데미シヤン）の樣子（ざん）ぶつた芸（げい）術（じゆつ）に對（たい）する又（また）、平（へい）俗（ぞく）的（てき）幸（しあ）福（ふく）の生（せい）ぬく（ぬく）い生（せい）活（くわく）に對（たい）する徹（てつ）底的（てきてき）の反（はん）抗（かう）と挑（てん）戦（せん）である。面（めん）白（はく）そう（そう）じやない？」

店主「一つ（ひとつ）だけ（だけ）はつきりわ（わ）か（か）る（る）こ（こ）と（と）が（が）あ（あ）る（る）」

中也「？」

店主「それ（それ）を面白（おもしろ）いと思（おも）うあんなも（も）と（と）う（う）変（へ）わ（わ）つ（つ）と（と）る（る）つ（つ）て（て）こ（こ）と（と）だ（だ）」

絹代「その本（ほん）とは運（う）命（めい）的（てき）な出（い）会（かい）い（い）だ（だ）つ（つ）た（た）ん（ん）で（で）す（す）ね（ね）」

S 14 京都街頭 1923年12月

バイオリンを奏でる永井を見ている中也。

中也「あんたはいつもここで弾いているのか？」

永井「そんなことはない。日本中あちこちだ。気が向いたらどこへでも行く」

中也「気ままなバイオリン弾き…か、屋根の上では弾かないのか？」

永井「演奏に命を懸けることはあっても、物理的に命を張る気はない」

中也「ハハハ！面白い人だ。僕は中原、中原中也って言うんだ。うちへ来て飲まないか、放浪のバイオリン弾きさん」

永井「永井だ、永井ヨシ！ただ酒ならいつでもいただこう」

フク「この男が、中也を劇団表現座の稽古場へ連れて行ったんです。そしてそこにいたのが、長谷川泰子さんでした」

泰子「私はその時、「有島武郎、死とその前後」という芝居の台本読みをしていました。中原は、薄暗い稽古場の椅子にチヨコンと坐って、私たちの練習風景をみていました。小さな中学生だ

なと思ってたら、声をかけてきて、これがダダの詩だよ、とノートを見せてくれたりしました」

S15 表現座稽古場

泰子に詩を読ませている中也。

泰子「タバコとマントが恋をした。その筈（はず）だ。タバコとマントは同類で、タバコが男でマントが女だ或時（あるとき）二人が身投（みなげ）（みなげ）心中したが、マントは重い（あつ）風を含み、タバコは細い（ほそ）が軽かった（かろ）ので崖の上から海面に到着するまでの時間が同じだった。神様がそれをみて、全く相対界のノーマル事件だといって天国でピラマイタ。二人がそれをみて、お互いの幸福であったことを知った時、恋は永久に破れてしまった。」

（タバコとマントの恋）面白いじゃないの」

中也「わかるだろ、創造は破壊から始まるんだ。君は女優だから、

台本のセリフを覚えて話す。文字という目から入る情報をいったんぶっ壊して音にして発するんだ。文字は同じでも音はみんな違う！君のセリフは君だけのものなんだ」

泰子「楽しそうに話し続ける中原の雰囲気が入って、それから

はしょっちゅう会うようになりました」

S16 新京極 1924年 4月

二人で歩いている中也と泰子。

泰子「まさか表現座がたった一度の公演で解散するなんて、思ってもみなかったわ」

中也「所詮京大の先生の道楽みたいな劇団だったのさ。でもマキノプロに入れたんだろ」

泰子「そうなんだけど、いつまでも稽古場に寝泊まりするわけにはいかなかった」

中也「給料出るなら部屋を探せばいいだろ」

泰子「大部屋女優にそんなお金あるわけないでしょ」

中也「それなら僕の所へくればいい」

泰子「いいの？」

中也「いいさ。明日にでもおいで」

泰子「中原の下宿は、隣に椿寺がある二階建て、底の二階の六畳間で二人、夜は部屋の端と端に分かれて寝てたんです。最初の頃はそんな風で、でも結局、ある晩私は襲われちゃいました。私が二十歳、中原が十七の時です」

尾崎豊 十七歳の地図

フク「私たちは中也が同棲しよるなんて、思ってもみませんでした。」

ついでこの間まで、寂しい、寂しいと小学校の先生に手紙を送って、暇なときは一人でローラースケートで遊びよると言っておったんですから」

絹代「豊は、17の時にデビューが決まって、18の時に家を出ました。それから二年間、あつという間にスターになって、私たち家族はあきれるばかりでした」

フク「それにしても、悲しい歌を歌ってらっしゃる」

絹代「自分に対する答えを見つけようとしていたのは、中也さんと同じなんじゃないでしょうか？」

フク「確かに、中也はまだ学生でしたが、同棲もしてて、周りに文学の友人も増えてきて、それなりに充実していたのかと思います」

絹代「お金なんていくらあっても使い道は知れてます。二人とも終わってしまおう十代の中であがいていたんじゃないでしょうか」

泰子「7月に中原は、富永太郎さんと知り合って、盛んに行きかうようになりました。太郎さんが9月に京都に腰を据えると私たちも側に引越して、それからはほとんど毎日、太郎さんが家に来てました。あの11月の日までは…」

S17 京都上京区今出川中筋通 中原下宿 1924年 11月
ほとんど怒鳴り合っている富永(23)と中也、その横で本など読んでいる泰子。

中也「確かにあなたはフランスへも行っていて、僕に多くの事を教えてくれた。それには大いに感謝もしてる。だからだ！だからこそ、頭でっかちなあなたの詩が許せないんだ」

富永「僕も君の詩が許せない。親の手紙が泡吹いた 恋は空みた肩ゆすった 俺は灰色のステッキ呑んだ！これが擬人化だってい

うのか？」

中也「私は透明な秋の薄暮の中に墮ちる？透明な薄暮ってなんだよ。戦慄は去った。道路のあらゆる直線が甦るだって、よりによって道路か？なぜ道にしない、道路なんて言葉を選んだる時点で墮落だ！」

富永「君のむき出しの感情に付き合うのはもうたくさんだ。誰もを自分の枠の中に引入れるのもうよしてくれ」

中也「あんたこそ、いい加減自分を隠すのはやめたらどうだ。体をポロポロにして、それをおぞろしい美辞麗句でごまかそうとするな！」

富永「カッコだけのダダイストが、君との40日を返してもらいたいもんだ」

中也「今までの話を通じてなかったのなら、こっこそ貴重な時間を失ったってもんだ！」

富永「失敬する！」
飛び出ていく富永。

泰子「あんなに罵り合ってたのに、太郎さんのからだがいよいよ危なくなっていて、12月3日に東京へ帰る時には、中原は、京都駅まで見送ったんです。なんだかんだ言って、中原にとつての文学仲間が太郎さんだけだったんです。3月には私たちも東京へ行きました。その太郎さんを頼って、東京の仲間につながりを持つとうと上京したんだと思います。特にランボーに通じてた小林秀雄さんに…」

S18 戸塚源兵衛 1925年3月某日
泰子の待つ部屋に帰ってくる中也。

中也「泰子、ようやく会えたぞ」

泰子「誰に？」

中也「小林だ。小林秀雄、この間は行き違いだったが、今日は捕まえた」

泰子「また強引に押しかけたんでしょ」

中也「太郎の紹介だ。邪険にはされんよ。それに奴は本物だ。少々理屈っぽい、ランボウの本質を捉えとる。間違はなく太郎の上をいっとるんじゃ」

泰子「たいそうな誉め言葉なこと」

中也「なりふり構わんところも気に入った。相当くたびれた黒の背広のポケットがこれでもかかってくらい物で膨らんでるんだ。表紙の取れた雑誌から洗面道具まで詰め込んで、かぶっている帽子は穴だらけ、そこから髪が突き出た」

泰子「ちよつと想像できないわね。お顔は？」

中也「ジャガイモ顔だな。ごつごつしたふてぶてしい面だ」

泰子「あまり期待できない感じね」

中也「でも中身はたいしたもんなんだ。小説家を目指しとるらしいが、あれは評論家だな。他人を分析し続けて、いずれ己を失うタイプだ」

泰子「馬が合ったのね」

中也「話がつきなかった。今度お前にも紹介する」

泰子「せいぜい楽しみにしてるわ」

泰子「黙って東京まで出てきてしまった中原は、知り合ったばかりの小林からお金を借りて、一人で湯田に帰ったんです」

フク「あれは4月の初め頃でしたか、中也が帰ってきたよりまして、だしぬけに「中学を卒業したから、東京へやってくるよ」と……」

絹代「ご主人は？」

フク「謙介は大反対です。でも中也は言い出したらきかん子です。あちこち頼みまわって、最後は私も折れて、謙介にも認めさせました」

泰子「中原が上京のお墨付きをもって帰ったのは4月の15日でした。名目は一年間の予備校通い。やっと落ち着いて、下宿の窓から雨が降り始めた夕方の景色をぼんやり眺めていたら、男が一人、傘もささずに濡れながら走り込んできました。それが小林でした」

S19 戸塚源平 縁側 1925年4月某日

小林秀雄がやってくる。

小林「奥さん、雑巾を貸してください」

泰子「はい」

受け取った雑巾で足を拭くと……

小林「どうも、小林です。中原君は奥ですか？」

泰子「ええ」

小林「では、失礼します（と上がり込む）」

残された泰子。

泰子「あの人は雨の中からスッと現れたんです。雨に濡れた小林は、とても新鮮な感じの男でした。その時、彼は中原としばらく話した後、帰っていきました。すぐ5月になって、富永太郎さんが療養先の片瀬を脱走、富ヶ谷の自宅に戻ってすぐ、中原を訪ねてきたんです」

S20 戸塚源平 1925年5月某日

茶を入れる泰子の傍らで話し込んでいる中也と富永。

中也「鳥獣剥製所、読ませてもらったよ。「すすけた板壁に、痴呆

のような口を開いた硝子窓。空のどこから落ちて来るのか知ることの出来ぬ光が、安硝子の雲形の歪みの上にたゆたい、半ばは窓の内側に滲み入る。人間の脚の載っていない、剥き出しの床板。古びた檜の木の大卓子」そこにあるものすべてを実に丁寧に書き出したもんだ。しかもタイトルにある鳥獣を不気味に登場させるための前振りにもなってる。見事だな」

富永「君に褒められるのは、うれしくも、悲しくも、そして苛立たしくもある」

中也「僕は思ったそのままを言ってるにすぎん」

富永「羨ましい限りだな。君のように生きられれば、と…ゴフツ、ゴフツ！」

中也「片瀬へ戻った方がいいんじゃないか？」

富永「戻るつもりはない。自分の体のことはわかっているつもりだ。一人の人生なんてすべて一期一会。君も病気も出会うべくして出会ったんだらう」

中也「人を悪霊のようにいいやがる」

富永「時に君はまさに悪霊さ」

三人で笑う。

泰子「私が太郎さんに会ったのはあの時が最後です。中原は太郎さんから乗り換えるように小林の住む杉並の側の高円寺に私を連れて引っ越しました。三畳と六畳の二間の下宿で今度は二階です。小林さんは一高を卒業して東大の仏文の新入生、年は私の二つ上で23歳でした。この家にはいろんな人が来しました。小林を筆頭に、永井龍男さん、笠原健治朗さん、多い時には5、6人で狭い三畳間で文学論に花を咲かせていたんです」

S21 高円寺下宿 1925年6月 某夜

枕を並べて横になっている中也と泰子。時おり、ボコンという音が聞こえる。

中也「泥棒だ！（と起き上がる）」

泰子「梅が屋根に落ちてくるのよ」

中也「いや泥棒だ。動いてる」

泰子「前に気になって確かめたの。庭の梅の木から実が屋根に落ちる音」

中也「泥棒だよ（下手に行って、階下を見張る）」

泰子「（一緒に起きたして）怖かったから昼間外に出て確かめたの。梅の実よ」

中也「泥棒だ。影が動くぞ」

泰子「怖いこと言わないで」

中也「僕は子供の頃とても怖がりだった。湯田の家に泥棒が入ったことがあるんだ。それからしばらく、僕は昼間でも泥棒を怖がってた」

泰子「今は平気なの？」

中也「怖いさ。どこかの影からいつ出て来るのか、とても怖い」

泰子「それなら、なんで、見てるの？」

中也「目をつぶっている時に襲われたら、と思うととっても怖いからだ」

泰子「本当に泥棒なら？」

中也「人だとわかれば、殴ればいい」

泰子「人じゃなかったら？」

中也「そんなものを見られれば、いい詩が書けるだろうな」

泰子「私が中原に何か得体のしれない怖れを感じるようになったのはあの夜だったような気がします。そんな時、中原が湯田の実

家に帰っている7月に小林が一人でやってきたんです」

S 2 2 高円寺下宿 1925年7月某日

二人で茶を飲む泰子と小林。

泰子「今日、中原がいないのは……」

小林「わかった。わかってたから来たんだ」

泰子「それはちょっと意味深ね」

小林「僕は、君と二人だけで話してみたかったんだ」

泰子「それなら、願いは叶ったってことね」

小林「そうだね」

泰子「それで？」

小林「それでって？」

泰子「願いが叶ったからそれで、おしまい？」

小林「いや、もっと二人で会いたくなつた」

泰子「中原に内緒に？」

小林「……できれば、暫くは……」

泰子「そうね。黙っていた方がいいかも」

小林「それは、会ってもらえるってことだね」

泰子「誘ってごらんさい」

小林「……」

泰子「それで、私は小林と逢瀬を重ねるようになったんです。小林は私を氣遣ってくれました。中原にはほったかされてましたから、とても新鮮で、しだいにウキウキ出かけるようになってきました。疾しさはありませんでした。私がそういうふうになる

S 2 3 銀座のカフェ 1925年9月某日

コーヒーを飲む泰子と小林。

小林「君は中原とは思想が合ってるんだな」

泰子「どういうことかしら」

小林「考え方が同じだってことだ」

泰子「あなたとはどうなの？」

小林「僕らは気があつてるんだ」

泰子「そうね。あなたといると楽しいし」

小林「君の未来が心配なんだ」

泰子「私の未来？」

小林「今のままでいいわけないだろ？」

泰子「それはそうだけ……」

小林「今度大島に行こうと思うんだ」

泰子「大島？」

小林「そうだ。一緒にいかないか？」

泰子「泊りになるわね」

小林「そうだ。品川から船で出る。そろそろ踏ん切りをつけるべき

じゃないか？」

泰子「……」

小林「来月3日、午後一時に品川で待ってる」

泰子「……わかったわ」

♪ ピアノ演奏

S 2 4 高円寺下宿 1925年10月3日

旅支度をして出かけようとしている泰子。そこへ中也が帰ってくる。泰子「お早いのね？」

中也「雨が降ってきたんだ。(荷物を見て) 出かけるのか？」

泰子「ええ、ちょっと」

中也「急ぐのか？」

泰子「そうでもないけど」

中也「ちよつと待てば、小降りになる感じだぞ」

泰子「そうね」

泰子「結局品川に着いたのは、一時間遅れの午後二時。小林の姿は
ありませんでした」

フク「富永太郎さんが亡くなったのが11月12日だったそう
す。中也は、電報を受け取ると翌日お宅を訪ね、二晩徹夜して
富永さんの遺稿を整理したと聞いてます。後で国に帰って来た
時、富永さんの遺影を弟たちに見せて、「これは偉い人だつた
んだよ」と何度も話していました」

中也「ほっそりと、だが骨組はしっかりしていた、その躰幹（くか
ん）の上に、小さな頭がのっかっていた。赤いチジれた髪毛
（かみげ）が額に迫り、その下で紅と栗とのやわい顔がほつと
り上気している。黒く澄んだ、つげの葉の目が、やさしく、た
だし、シニカルでありたそうに折々見上げる。友人の目にも、
俗人の目にもともに大人しい人という印象を与えて、富永は
逝った。そして、それがすべてを語るようだ」

S25 井の頭公園 1925年11月15日

散歩している中也と泰子

泰子「お葬式の時、小林さんはいらっしやらなかつたわね」

中也「知らなかつたのか？入院してるんだ」

泰子「ご病気なの？」

中也「盲腸だそうだ。ちやうど葬式の日在京橋の病院で手術だつ
た。お前も見舞いに行つたらどうだ？」

泰子「そうね。暇な時にでも」

S26 小林の病室

ベッドに横たわる小林。横で林檎をむいている泰子。

小林「正直、君が見舞いに来てくれるとは思わなかつたんだ」

泰子「気まづかつたのは私の方です。あの時、一時間も遅れてし
まって」

小林「大島まで船旅は長かつた」

泰子「ごめんさい」

小林「今日来てくれたことの意味を考えてもいいのかな」

泰子「病気はおつらいでしょうけど、私たちには良いきっかけに
なつたんですわ」

小林「退院したら僕は家を出る。一緒に住もう」

泰子「はい」

泰子「中原にはいよいよ出ていくその日まで黙っていました。下宿
の外に荷物を運ぶ運送屋さんを待たせて、奥の六畳で、何か書
き物をしていた中原にこう言つたんです」

S27 高円寺 中也の下宿

荷物をまとめ、出ていこうとしている泰子。

泰子「私は小林さんのところへ行くわ」

奥で書き物をしていた中也の肩がびくっと震える。

泰子は、そのまま下手へ出て、荷物をリヤカーに載せ、去る。

一人残されたダウンライトの中也。

中也「私はちやうど、その女に退屈していた時ではあつたし、とい
うよりもその女は男に何の夢想も仕事もさせないたちの女なの
で、大変困惑していた時なので、私は女が去っていくのを内心
喜びもしたのだつたが、いよいよ去ると決まつたその日以来、
もう猛烈に悲しくなつた。私は自己を失つた！しかも私は自己

を失ったとはその時分かっていたのであった！私はただもう口惜しかった、私は「口惜しき人」であった」

泰子「黒き浜辺にマルガレエテが歩み寄る ヴェールを風にちぢにされながら。彼女のししは跳び込まねばならぬ、いかしき神の父なる海に！崖の上の彼女のの上に 聖霊が怪しげなるスジを描く。彼女の思い出は悲しい書齋を取り片づけ 彼女はじきに死なねばならぬ（死女）」

中也「秋空は鈍色（にびいろ）にして 黒馬の瞳のひかり 水涸れて落つる百合の花 ああ 心うつろなるかな 神もなくしるべもなくて 窓近く婦（おんな）の逝きぬ 白き空盲（めし）いでありて 白き風冷たくありぬ 窓際に髪を洗えば その腕の優しくありぬ 朝の日は濡れてありぬ 水の音したたりていぬ 町々はさやぎてありぬ 子らの声もつれてありぬ しかはあれ この魂はいかになるとなるか？ うすらぎて 空となるか？（臨終）」

泰子「これ私の事よね」

中也「臨終は、馴染みの娼婦のことだ」

泰子「今更照れなくてもいいわ、私に死んで欲しかったの？」

中也「そんな単純なことじゃない。今日はぼくの魂は病み カラスさえ正視ができない あいつはちようど今頃から つめたいブルンズの病室で 透明バラの日に燃やされる」

泰子「宮澤賢治までもちだすことないわ。今更そんなに悔やむんなら、もっと扱いようがあったんじゃないの？」

中也「「これは手だ」と、「手」という概念を口にする前に感じている手、その手が感じていられば良かったんだ」

泰子「宮澤先生にはできただけど、あなたには無理だったのね」

中也「失わなければわからないこともある」

泰子「取り戻せると思うの？」

中也「…」

フク「後から大岡昇平さんから伺ったんですが、この頃から中也はクラシックの音楽関係の方たちと親しくしていたようです。時代が大正から昭和に代わって、私たちには日大に通っていると言いながら、その実、一度も大学には行っていないかったそう、昼頃起きだして、あちこち歩きまわって、ひどい時は夜中までうろろして、朝方寝床に倒れ込むような毎日だったと聞いております。その朝方に書いたのが…」

中也「天井に朱きいろいで 戸の隙を 洩れ入る光、鄙（ひな）びたる 軍楽の憶（おも）い 手にてなす なにごともなし 小鳥らの歌は聞こえず 空は今日 はなだ色らし、うんじてし人の心を 諫めする なにもものなし。 樹脂の香（かおり）に 朝は悩まし 失いし 様々の夢 森なみは風に鳴るかな ひろごりて たひらかの空 土手づたい 消えてゆくかな うつくしき さまざまな夢」

フク「あちこちほつつき歩いては、様々な方たちと知り合い、せっかく仲ようしていただいとるのに、酒を飲んで、ようつつかかおったそうです」

永井龍男「初対面の中原中也は、汚れたゴムまりを濡れ雑巾でひと拭きしたような顔をしていた。何か、いたく不吉な感じであった。中原の評判はどこでも悪かった。友人はとにかく、その家族たちは、すべて彼を嫌悪した」

河上徹太郎「僕が初めてあった頃の中原は、丁度ヴェルレーヌを描いたランボーの肖像そっくりの格好で、両手をポケットに突っ

込んで歩いてきた。そして、人に会うとすぐに絡んできて、実に傍若無人の付き合いをした。常に興味と嫌悪の交錯した気持ちを感じないで彼の話を聞いていることはできなかった」

高橋新吉「昭和二年頃、中原君は私を訪ねてきた。それから十年ばかり、血族的な親しさをもってつきあったともいえるが、ある時はよって暴言暴行をぶつけ合いもした」

諸井三郎「初めて私を訪ねてきた中也は、一目で芸術にうつつを抜かしているとわかるような、黒い短いマントを着、それに黒いソフトのような帽子をかぶっていた。一種異様な、しかし強烈な印象を与えていた」

♪神よ憐れみたまえ J. S. バッハ

どうかお憐れみください。神よ、憐れみください。私が流す、この涙ゆえに！

どうかお憐れみください。神よ、どうかお憐れみください。お憐れみください。

私が流す、この涙ゆえに！どうかお憐れみください。神よ、お憐れみください。

私が流す、この涙ゆえに！どうかお憐れみください。お憐れみください。私が流す、この涙ゆえに！

28 図書館 1928年4月

机に向かって原稿を書いている中也、小林が向いの席に座る。

小林「中也：久しぶりだな」

中也「：小林か。5分待ってくれ」

小林「え？」

中也「もう少しで書きあがる。そしたら散歩でもしよう」

29 上野公園

歩いてきてベンチに座る二人。

中也「ずいぶんご無沙汰だな」

小林「お前は、相変わらず書いてるんだな」

中也「僕にはそれしかすることがない。丁度よかった、これを…読んでくれ小林の意見が聞きたい」

小林「実は僕も、まだ途中なんだが…」

中也「小説か？」

小林「いや、翻訳だ、ボードレールの」

中也「やったぜ！じゃあ僕がこれを読むから、お前はぞつちを読んでくれ」

小林「ああ。柱も庭も乾いている 今日のは好い天気だ 縁の下では

蜘蛛の巣が 心細そうに揺れている 山では枯木も息を吐く

ああ今日はいいい天気だ 道端の草陰があとけない悲しみを

これが私の故郷だ さやかに風も吹いている 心置きなく泣かれよと 年増の低い声もする ああ、おまえは何をしてきたのだと…吹き来る風が私に言う すごい！」

中也「すごい！すごいよ！やはり君は僕が認めた天才だ！」

小林「！？」

中也「君の文体で、ボードレールの思想が手にとるように伝わってくる。ただの翻訳じゃない！新しい文字の誕生だ！早く続きを書いてくれ！小林！お前は日本に批評の地平を開くんだ！」

小林「嬉しいよ。お前がそう言ってくれて…本当に嬉しい。今度は俺の番だな」

中也「ああ、即直に言ってくれ」

小林「これは湯田の事なんだな」

中也「そうだ、正月に帰った時に思い付いた」

小林「傑作だ」

中也「小林！お前ならわかってくれると思っていたぜ！」

小林「前にお前の詩をけなしたのを覚えているか」

中也「ああ。辛辣だった。正直落ち込んだよ」

小林「口惜しかったんだ」

中也「口惜しかった？」

小林「俺が小説でくすぶっていた時に、お前の詩はキラキラと輝いていた！妬んでたんだ。だから、口汚くけなした」

中也「全部が中傷だったわけじゃない。凶星のところもあつたぞ」

小林「いや、あの詩は素晴らしかったんだ。この詩と同じように、

今はそれを素直に言える。お前の詩は、心の深いところとすつと染み入るようだ」

中也「なぜ今？」

小林「きつとお前が褒めてくれたからだ。俺はずつとお前に褒められたかったんだ」

中也「それで、泰子を奪ったのか？」

小林「そんなことは……」

中也「小林！正直に答えてくれ、お前本当に泰子を愛しているのか？」

小林「勿論だ！そうでなきゃ……」

中也「そうでなければ、どうしたんだ？逆じゃないか？泰子を僕から奪うことが目的だったんじゃないか？」

小林「……」

中也「僕は今、失ったものの大きさに押しつぶされそうなんだ。だから、何度か、泰子を取り戻そうとした。それで、お前にも泰子にも嫌われて、結局疎遠になっちゃった」

小林「つらい思いをさせたんだな」

中也「違うんだ。その辛さ、苦しき、悔しさが僕には必要だったんだ。追い詰められたから、他に何もできなくなったから書いたんだ」

小林「失ったものの大きさだけ、受けとったものも大きかった……」

中也「小林、お前今幸せか？」

小林「落ち着いてはいる。でもお前には会いたかった」

中也「謝りたかったのか？」

小林「確かに許して欲しかったところはあつた。でもそれは、たぶん泰子のことじゃない」

中也「……一番かわいそうなのは泰子かもしれないな」

小林「……」

中也「不思議な女だ。泰子は、僕もお前も文学者として成長させてくれた。でも本人はどうだ？」

小林「……」

泰子「それから一か月後の5月、小林は、私の前から消えました。それを知った中也は、あちこち手を尽くして小林を探してくれました。それがとても楽しそうに見えて、私は少し悲しかった」

フク「同じ5月の16日に謙介が亡くなりました。それまでの数か月、中也は月に一回帰ってきて、親孝行ぶりを発揮してましたけど、謙介の葬式には帰ってきませんでした。というより、「お父さんは死んだけど、あんたは帰らん方がよかるう」と、私が帰らせなかつたんです。「長い髪をして葬式にでるのはみつともない。あれは病気ということにして、帰さんほうがよかるう」と」

絹代「それを後悔してらっしゃるんですね」

フク「中也は不平を言わなかった。けど、二度とない父親の葬式
じゃから、中也を帰らせればよかったと：」

泰子「小林がフランス語を教えていた成城の学生だった大岡昇平さ
んが中也の仲間に加わったのは、小林が私を捨てる少し前だっ
たと思います」

大岡「同人雑誌を出そうと言いだしたのは、中也です。同人は、僕
ら二人の他に河上徹太郎、村井康夫、阿部六郎、古谷綱武、富
永次郎の5人。中也は、その頃、かなりの詩を書いていたんで
すが、発表されたのは、朝の歌と臨終だけでした。白痴群っ
ていう名前は、中也独特の皮肉だったんでしょう。彼は、いわ
ゆる文壇のインテリを軽蔑してましたから。こつちが本物だっ
ていう意味です。六号まで出しましたんですが、その間に中也が多
くの傑作を生む土台になっていました。創刊号では泰子さんへ
の思いだけを綴っていたんですが、最後の六号の時は、ほとん
ど一人で書いてました」

S30 居酒屋 1930年4月

酒を飲んでいる大岡と中也。

中也「大岡、文学とはなんだ？言葉とはなんだ？」

大岡「言葉とは、僕らの思考を具現化する道具、そして文学はそれ
によって作られる人知の結晶だ！」

中也「ハハハッ！相変わらず笑わしてくれる」

大岡「な、何がおかしい！」

中也「まるでわかっちゃいないな。言葉とは神だ！僕たち文士はそ
れを代弁するだけの道化に過ぎない。そして、文学は宇宙だ
よ。無限のなさ、永遠につかめっこないんだ！」

大岡「：」

中也「汚れちまった悲しみに 今日も小雪の降りかかる 汚れち
まった悲しみは たとえば狐の皮衣（かわごころも） 汚れち
まった悲しみは 小雪のかかってちぢこまる 汚れちまった悲
しみは なに望むなく願うなく 汚れちまった悲しみは 倦怠
のうちに死を夢む 汚れちまった悲しみに いたいたしくも怖
気づき 汚れちまった悲しみに なすところなく日は暮れる」

S31 鳴滝 1932年3月

安原喜弘と中也がやってくる。

安原「河瀬の音が山に来る 春の光は石のようだ、笥の水は物語る
白髪（しらが）のおうなにさも似てる 雲母（うんも）の口し
て歌ったよ 心は涸れてしわがりて 巖（いわお）の上の綱渡
り。知れざる炎、空にゆき！ 響きの雨は濡れかむる！われか
にかくを手をたたく この詩はこの滝のことなんだろ」

中也「子供の頃ここで遊んだんだ。親父は僕が溺れるのを恐れて、
水泳を教えてくれなかったから、こんなところで水遊びさ。で
もな安原、その詩は、僕が詩人になることを決意した詩だぜ」

安原「なるほどな。僕も一時は、文学者を目指したけど、その辺は
サッパリわからん。あきらめて正解だったようだ」

中也「正直だな。安原、君の存在が僕にとってどれだけ重要かわか
るか？」

安原「それもさっぱりだな？」

中也「じゃあ僕は君にとってどんな存在なんだ？」

安原「変人だな。でも実に興味深い変人だ。生き方が危なっかしく
てハラハラさせられるが、君といるとなんだか癒される」

中也「雪舟が見たくなった」

S31 雪舟庭

庭を眺めている二人。

中也「応仁の乱の頃、大内政弘が雪舟に造らせた庭だ」

安原「見事なものだな」

中也「ぐるりと回れて、見る場所それぞれで、見事な景色を造っている」

安原「そこまで考えているってことだな」

中也「見る方は気楽だ。いいか、置いてあるのは石だ。ただの石なのに西洋の庭にある凝った彫像を超える美しさがある。見る者の想像力をくすぐって、心を豊かにしてくれる」

安原「確かに……」

中也「でもな。それを考えてた雪舟は、必死だったはずだ。誰も教えてはくれない答えをたった一人で見つけようとしてたんだ。それはとても、孤独な闘いなんだ」

中也「ほろほろこれが僕の骨だ 生きていた時の苦勞にみちたあの汚らわしい肉を破って、しらじらと雨に洗われ ヌックと出た骨の尖(さき)。それは光沢もない、ただいたづらにしらじらと、雨を吸収する、風に吹かれる、幾分空を反映する。生きていた時に、これが食堂の雑踏の中に、坐っていたこともある、みつばのおしたしを食ったこともある、と思えばなんとも可笑しい。ホラホラ、これが僕の骨 見ているのは僕？ 可笑しなことだ。靈魂はあとに残って、また骨のところにやって来て、見ているのかしら？ 故郷の小川のへりに、半ばは枯れた草に立って、見ているのは、僕？ ちょうど立て札ほどの高さには 骨はしらじらとんがっている。(骨)」

フク「中也を結婚させたのは、1933年12月、26歳の時でし

た。嫁の孝子さんは二十歳でした。式は湯田で上げましたが新婚生活は東京新宿花園町のアパートでした」

S32 花園神社 1934年4月

一触即発の中也と大岡。

中也「神がいるから、神が永遠であるから、森羅万象は神の一部であり、天地一切が、神の声であり、世に偶然なるものは一切なく、何事も必然ということになる」

大岡「しかし、僕は今まで生きてきて、神をみたことなんかないぜ」

中也「それがお前の限界だ。いいか詩人とは何か？」

大岡「酔っ払いだな」

中也「黙って聞け、詩人とは「歌う者」なんだ。神の事を、そして神ってのはたまに「悪意の仕業」と思えるようなこともする」

大岡「何のためにそんなことを！」

中也「一切がよくなるための変化さ」

大岡「だとすれば、神ってのは、結構なひねくれものだな」

中也「貴様！神を愚弄するか？」

大岡「そんな人間っぽい神様は信じられん」

中也「貴様あ！」

小さな中也が大柄の大岡に殴りかかる。中也の頭を押さえつける大岡。ギャグマンガのようなけんか。それを見て、笑っている孝子。孝子「私、けんかを止めようと思っただんですが、もう可笑しくって、げらげら笑っちゃったんですよ」

フク「私にはできんなあ」

孝子「中也さんがガーガーいうときに、お母さんがまじめになって聞いてじゃからいけんのです。私のように笑っていらっしやい。

そうすれば張り合いがなくなって、怒るのやめますよ」

フク「孝ちゃんは笑えるからええけど、私は腹が立って、笑うどころじゃありません。泣きたくなりますよ」

孝子「中也さんは子供みたいなものです」

フク「その中也に子供が生まれることになって、二人は湯田に帰ってきました。そして、10月18日、孫の文也が生まれたんです」

孝子「中也はその時、東京に帰っておりました。ちょうど、最初の詩集「山羊の歌」を出版したところで、文也の写真を送る、と連絡したんです」

中也「生まれたての子供の写真は、人間の子のように見えんから、そんな写真はとらんでもええ」

フク「中也は12月に帰ってきて、ランボー全集を翻訳していましたが、仕事の合間には文也を揺可愛がりました。長門峡に一人で出かけたのはその頃だったと思います」

S33 長門峡 1935年12月
佇む中也。

中也「長門峡に、水は流れてありにけり、寒い寒い日なりき。我は料亭にありぬ。酒くみてありぬ。われのほかに、客とてもなかりけり。水はあたかも魂あるものの如く、流れ流れてありにけり。やがて蜜柑のごとき夕陽、欄干にこぼれたり。ああ！そのような時もありき、寒い寒い 日なりき」

フク「東京に戻った中也は、貴ちゃんの大叔父さんの所にあった二階家に引越しました。中也は勤めに出たことはなく、ずっと家からの仕送りで生活しておったんですが、就職試験は受けたことがあります。NHKも受けてたんです」

S34 NHK 面接会場

面接官の前に座っている中也。

面接官「履歴のところに学歴も職歴も無いようですが」

中也「確か、書いたと思います」

面接官「確かに書いてはあります。詩生活、詩で生活してらっしゃるってことですか？」

中也「そうです。それ以外の履歴が私にとって意味があるのですか？」

面接官「就職なさろうって方は、そういうふうには考えないんじゃないでしょうか」

中也「そんなバカな就職というものはご免です」

孝子「受かるわけじゃないですわね。その日帰った中也は「勝ったぞ！」って誇らしげでした」

フク「他から見れば優雅な暮らしでしょう。休みの日には文也を連れて、上野動物園にも行っていたそうです」

S35 上野動物園 1936年5月某日
孝子と文也を連れ、園内を歩く中也。

中也（オフ）「文也も詩がすくになればいいが、二代がかりならかなりのことができよう。俺の蔵書は売らぬこと。それには色々書き込みがあるし、何かと便利だ。今から50年後だって、俺の蔵書だけを十分読めば詩道修行には十分間に合う。迷わぬこと。迷いは俺がさんざんやったんだ」

絹江「中也さんも豊と同じでお子さんをとても愛してらしたんですね」

フク「でもその文也は50年どころか、その年の11月10日、結核で亡くなってしまいました」

中也「ポロリ、ポロリと死んでゆく。みんな別れてしまうのだ。呼んだって、帰らない。なにしろこの世とあの世とだから叶わない。今にして、僕はやっとこ悟るのだ、白々しい自分であったと。そしてもう、むやみやたらにやりきれぬ。あの世からでも、僕から奪えるものでもあったら奪ってくれ。あー！」
号泣する中也。

中也「また来ん春と人は言う。しかし私はつらいのだ。春がまた来たって何になら。あの子が帰ってくるぢやない。おもえば今年の五月には、お前を抱いて動物園、象を見せても、にやあ、と、いい。鳥を見せても、にやあ、だった。ほんにお前もあの時はこの世の光のただ中に、立って眺めていたっけか：（また来ん春）」

フク「中也は千葉の精神科の病院に入院しました。希望の光をなくしたんですから、仕方なかったと思います」

孝子「私はその頃、次男の愛雅（よしまさ）を生みました。病気が治って退院した中也はこの子もとてもかわいがっていました。が、夏ごろからまた具合が悪くなって…」

S36 鎌倉駅前 1937年10月5日
ステッキをついて歩いてきた中也が、フラッと倒れる。

♪ 挿入 卒業 尾崎 豊
フク「中也は私が鎌倉に来て一週間ほどで亡くなりました。その間も、中也の意識はもうろうとして、何をいうてもわからんようでした。それでも、一度だけ、中也の意識がはっきりしたことがあります」

S37 病室 10月22日 午前零時
病床の中也、その横にフクと孝子。

中也「おかあさん、（フクの指をたばこを吸うように自分の指に挟んで二度吸って）僕は本当は孝行者だったんですよ。今にわかる時が来ますよ…。本当は孝行者だったんです」

♪ ピアノ演奏

T 中原中也 午前零時10分 結核性脳膜炎で死去 享年30
中也の死後、二冊目の詩集「在りし日の歌」出版。その直前の一月、次男愛雅もこの世を去った。翻訳以外では立った二冊の詩集しか出さなかった詩人の残した350余りの作品は、今も多くの人の心を刺激し続けている。

参考文献

- 「中原中也全集全五巻別館一」（角川書店）
- 大岡昇平著「中原中也」（講談社）
- 中原フク述 村上護編「私の上に降る雪は」（講談社文芸文庫）
- 長谷川泰子 村上護編「中原中也との愛 ゆきてかえらぬ」（角川ソフィア文庫）
- 青木健著「中原中也 盲目の秋」（河出書房新社）
- 青木健著「中原中也 永訣の秋」（河出書房新社）
- 青木健編著「年表作家読本 中原中也」（河出書房新社）
- 「群像日本の作家15 中原中也」（小学館）
- 野田真吉著「中原中也 わが青春の漂泊」（秦流選書）
- 安原喜弘著「中原中也の手紙」（講談社文芸文庫）
- 「新潮日本文学アルバム 中原中也」（新潮社）
- 月子著「最果てのサーカス 1〜3巻」（小学館）
- 尾崎康著「尾崎豊の愛と死と」（講談社）